耻耳世省抄

二

1261
2

1261
2

諸道聽耳世間猿　一之巻

宮城県図書館

目録

一回　孝行者力ちからさけの相撲取
抓ぐ肩巻七尺ゞ貴痛
ゆゝしき扇ぐかち花の地ハ
小山にそさ古市の渋雪

二回　宗有ち二向月の見へぬ仮名者
看經ゝ義を見ぬ
あつまるかニ十四軍ゝ
見ぐるの仮ハ白雪の法文

三回　春あるとも鬼一口ハ九ち茅屋
繁てゞもかゝぬ内花ち
みるとちぐさの男舞
笑も理分賢の門遠へ

一　孝行ちから力のうゑけのお撲仮

孔子の参や骨ありとゆせられさハ弟子ハちとうゑひと
のうるロ、ち弟子ハ孝行ちちとまん
やでゑけ並ち人なゝぬ
春ゝゝ遠ひ茶火福ぐるゝめものぐらし杉ゝ栗ち
祝ぐためぐし拾ゝ親の方ゝ拾ていゆる孫ゝ
ゆんまうゑ悪ひんひゑの親ゝ世ゝ多く河豚の蜂
のゆゝに切ても実ても姫ゝ病者ゝ更
乳だゝしゝ仮ゝと稽ち者ゝ遠三人流ゝて
精谷ち弟ゝ中ゝ智ハちの見ゑ似ゝゝとゝ

がくるの前に母子の親はうつり親父のたくさんと後成つ
て息しそのうちかくまくばかりとなりまして今時分白い
歯乃せをどに追つかそも遠屋の家令猿うち始人の一切
笑蕣花のうちに行田の新くさつの乃る行のうハ。さや
つとうあつとうわそ居る世の中ありぬ横孔ゐるかい
おせ生浦ゐ所とそ白丸のお樓ありどころすれ九ちさ
うそ一筋の行へ行く尾上の滝も近ごろ猿よハ雪の源と
乃せ立て冷ゑつて空さ所とたつ沼くいく秋祈さあ
てくしわび浦ゐ所二新く巷ゐ行ゐ麦一升の働さ。
新ハ星といでられて芭花の垣淀へ庭ゐ麦一升の働さ。
名ハ星くれて中さ蔵の角くもあくさふて親達と安ふて

やくあひさいこ宮十八年の和よ才を彩よちさひて才を
の立支抜くと追わく実令祇ありて山親父ハ小物変ゆて
大汚てひ。あ使ゐて也ゐ堀ぬ世帯庭ゐうとあ貧くう
せハ鬼の女房ゐ鬼神とゆう擬京も同くあるいて計ゐ
もさうぬ石河擬。三宮の新夕の和よ乃猫の菜とのゑ張
口ゐ口ゐのいそを和の菜欲ゆさ人を祢のけ。れて猫擬ゐう
かくり子といぢりたそ。ハ生洗ゐたくの物変の元ひうもく
なくのと祢すりうれあり快新。紙ぬ鬼の母ゐる関れも古儀
ほどゐ滅をこばしぬ粉ゆ。さくあくよ紀くうの才ゐふくく
新ひ出してあやかりこの才帝ゐ痛。胴の下に口ゐぬく
いつをうさりの湿病ひ立ゐる横へもせと新もゐ口ゐも

ひさ〜坂の長浜とハ云へかゝり。浦〜ゆゞ分ケて見渡
様ゝとゝ見うみ元も迎もにぎ〜ぬ来六十日と。ハ見を始〜
あゆて気と長さ江ハ大坂の勧をお撰ばてもきて云〜ち
やゝ生〜とうあくのかりて当付しの世ての〜へぞ〜いても
つさ波の美食れとの小和。横浜おを浦〜ゆとかいろハ
初〜そうに八月人さうけり。ちゆの関れハ仙蓑の眼力高の
山場山猪紙及の強横仔丹し鬼面雑談し唐縮ゆ〜いふ
右今の大会〜りその功者。東西ハ〜れて見くしさわ今
ゝひよのお撰じやゝを年の大ゆ〜る本横ゞ元ハ〜り和の
人数集る所の所人京も大坂月和しのゆ世ハ方の生
和のお撰し揚じ。ぼ生の作支
もの通二度見ハ〜ハ〜ハでと。ゆ元交絡酒の羽織し彩門の
大絡給。今ゝゆ東あと包ますてゞ。ゆ元ゝ
の松川美ハ〜ゆ行力味で居ゝ生ゝ。ゆゝ嵯かゝ毎日く新ゝ
ぎ〜おいゞ見ハまゝ〜ひつゆそ。ゆく日も春ゝ日もゆゝのゆたく。
時天十日和の月ゝゆ行付〜通てゝる酒の和山の長見たゝ。
ゆ生ゆのあ気も見ハ生と塩もあ〜ゆ通ハ。ハ清の塩さゝ〜ゆ
お髪お撰しあゝて去ゆハ通ハ浦〜和ハ秋ゆ〜ゆとはゆて
の男浦せゆて清ゆゝゆハけゞと一あたゝすの分の油祥ゝ
志かゝゝゝ付。西通へいゆゝ傳ゆ生ゆのお撰の美ゆゞゝと和と
つゆて。十二三ゆ通の出の長。拍新ゝゆつ通て祥清の川ゆ
で剥ゞ尼ゞ後。ゝゆゝ付ゝゝハゞ尼ゞと見ゝ月人ハゆ表唐川や

いの道ときうぬ神んぞ理で成も後援の者なの里も行る
てかうる行く紀世の中と祖ゞ行と義家の里ゞ揚家ゞも
霊祭ひゝなる歴代よハをゝ人さ也ゞ行ゞるゝ中やゝ振
意も高くゝ人も多紀家ゞ代いつまで色でいく田の里の業
行るゝ中ゝ野越のゝ紀世と逆家とおやゝの西ゞ名さ人
ゝ行ゞ中やゝ内ゞゝ人ゞ中ゝ内へ屋也ハ義祖ゞ内也
ゝ出て内ゝ人の雨ゝ行ゝとかまゝと大坂二事ゞけまゝゝく
也ゝの義ゝ祖ゝハゝ月ゞ中ゝ義ゞ也ゞ家ゞゝ人ゞ行ゞ
ゝ行ゞであゝと行ゝけゝ也ゝ中ゝ行ゝ中ゝ行ゝ玉
出ゞゝゝゝゝゝゝ行ゝと出ゝて月ゞ内ゝ裏祖ゝ上
方ゝ行ゝゝゝゝゝ大ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後の中ゞ代ゝ祖ゝゝ人の世男ゝ大坂の後ゝ内ゞゝ也ゝ遠ゝゝゝゝ。
同ゝゝ今の一ゝゝゝゝゝゝゝゝ後ゝのゝゝ代ゝゝゝゝゝ甲賢ゝゝ
時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

坂のけんやで俵湯をつかひ拾このでごさ〳〵ふ釈ハ拾ぐるハ
ふすゝといふたゝ〳〵二つも遠ゝさのハ金ひ日ぶ一のふ巻者〳〵ハお
の金ぢうのどやと。をたけて戻つゝ長ゝよ親業一ゝ俵さす
ゝ責せさげる泥拾釈。こんるゝ源る家へありがゝふ目のめはんも
うゝぐぢう。浦〳〵市ハ戻ゝやいゝる拾ぎ付ゝ金てぢりといそゝし
ゝゝでハゝひゝいひ沢すゝぐつゝたゝぐいんも拾ゝふ異者を
ゝ〳〵拾ゝ方にふ自由さ付ます。拾恵〳〵ゝきげゝ〳〵ゝ下さんと
釈くのたゝくのたゝ〳〵ど祝のみゝけゝ元光ゝ拾ゝハ今ゝ元のお撲ゝ
拾業ゝりて。蜻の見一ゝ拾ゝりとハ食ゝさゆ人脚稽つゝる
んゝさ〳〵ゝ中でのお撲形ゝ浦くのゝ個をゝたゝぐひて黄蘇
制裏のゝぢゝちゝ肉ゝさゝて。端かゝあゝゝ見宰の大和のゝ拾ゝ元

お撲おゝ金ハおゝゝもありず旅ゝぐもて今ゝ元ハ拾ゝも拾ゝゝ七日
のお撲拾ひゝとゝゝハゝ元ゝ金ゝぐゝ。ゝゝぐゝ金ゝの古旅ゝぐゝも付ゝ
ゝ拾ゝゝ入ゝゝゝ金ゝ祢ハ。ゝ伏の布拾ゝぐゝ元ゝ拾ゝゝ
ゝ拾ゝゝて。ゝ勢ひゝ京のお撲ゝハ拾の金ゝゝ金ゝんの元ゝ
ゝ拾ゝゝ。竹の内流ゝ金ゝて古布川ゝさゝかゝ金ハ拾ゝゝ
冥元ゝゝ。ゝゝくゝゝ。ゝゝ金ハ拾ゝ金ハ拾ゝゝ
の疲男つゝぶの肩拾ひゝゝて。ゝ拾ゝ元の節ゝ拾ゝ拾の涙ゝゝ
拾ゝゝて。ゝ拾ゝゝ金ゝ。ゝ拾ゝゝ。ゝ拾ゝ元ゝ拾ゝ方ゝゝ
ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ金ゝ。ゝゝ拾ゝ元ゝ拾ゝ。ゝ拾ゝ
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝ

もゝひきまつぐ金次郎といふものあり。其人小柳にて乃至び小柳にいと
新つさ。英名神の中にあるものでしかるを。彼男を亜墨利加食
はうまんて先合しに接そる亜墨利加はどのようなるにて活まで
さまざま扱ひ接の主ご見まで付まつり。ゆゑ亜墨利加のの
じやふくさも勝とりうづつそ大地へ。ごとの発とも亜び扱ひ亜
おぐ〜を祈ますぐ活さ。拳人と一緒うつ亜つさ亜墨利加の
うのみと考ひよるにどりて〜て。拳れ〜れ亜つさ天乃人を教
ものう。るなやはう〜新し病ひ新ごつ〜ていごみといむ耐と姫
ふ〜亜の病有扱ひ〜げふ方代の毒の前まつこえて学まの
も天ありうれ命なり氷

二　宗有さ一向目の乃人ぬ伝ん者

玄浄玄寺の伝法を独宮せ〜て。関景徳〜地初徒〜人ごの乃
とまぜて拳亜婆のたうの死のいたゝごなごーげ乃人
乃の第一見ぢ〜ょ清てゆ〜人の命。引ゝ附ゝかさ〜ゝ一枚と。
鎖ひ清ひの亜会と新亜さ。婆嬢の稼ゝ代ゝひ出
さ亜ぜ拳扱とゝ〜ふ信ゝ出亜ハ七生ごゝ乃ハ半て生ゝ〜ごと
ざゝと。表もかゝの亜人特妻ご安寿〜さ〜の表〜亜〜扱ゝ
さ表もそ〜ょう付出さゝ〜ど。活て居さ後井ご和当扱ゝ
つ〜人の伝法ゝ拳扱亜ゝて亜拳亜すゝ〜半ゝう乃ゝ〜
扱ゝ〜やて見ハとゝ〜さ扱乃扱ゝ〜ゝ通て活ゝ亜ハ。亜ゝ
せ亜ご〜表〜学とゝ〜ゝて扱とゝ表ハ人ゝ亜ハ人ゝ亜ゝの〜見
表亜で半ゝ拳ゝ表〜ゝ。ぜ亜男ハ人ゝと半とご姫ゝ亜ゝく。

茶市の外に牛の食物のおかぐを立てをのゝ一云て居りて
出てゆきぬれば。行燈八畳間に黄と柿とごゝ。此人々合ゝをの
中ゝ紙ちらしあげをの間てはゆゝる信ゝ相ゝの八畳間へ後
ゝ来ゝゝゝもたゝ人ゝ行よゝ見ゝ一あで情ゝかゝれば嬉しの二
ゝ親密ゝ人の刀儀仏神ゝ出家ゝ青給せ女房の在
てなゝゝもせよ猟漁をもせよ一向ゝ合伝すゝべゝて次ゝ
中ゝゝまゝめゝ来世の成生の人ゝで八後ゝ福ゝ商業の
ちゝゝあげゝのゝゝのゝゝ犬のゝもゝ人のゝゝゝゝ内分ゝ連絡ゝ
松ゝ世話ゝ物ゝ上ゝの家面ゝたゝ七異ひ亦。親ゝ嫌
ゝ自て特別素麺のあゝ来ゝ常盆常彼岸のゝ
ゝ七ゝゝ見ゝて也ゝゝ宗旨ゝ

よゝて生家ゝゝ伝ゝ代ゝ相ゝ投ゝ代ゝ他の宗ゝ
百倍して三百里ゝ隔ゝの仏花の奥ゝ寄ゝ付ての宗旨
宵ゝゝ蒲団ゝの中ゝ小判の掌ゝ残ゝ寝ゝ
ゝて。流をこゝ出ての出来ゝ彼ゝ八後今の伝ゝゆゝゝのゝ。
れゝ信ゝゝゝて一猫三文の白米秋冷ゝ困ゝ人
ゝ寿ゝて。一生ゝ忘ゝゝの一難すゝ忘ゝ祈ゝ人ゝ
ゝ人ゝ源の為ゝ今ゝ祖師の切徒の廣大ゝゝは。ゝ内
の相ゝゝゝゝの百姓ゝゝ堂ゝゝゝ代ゝの世ゝ後神仏八難
ゝゝ山後ゝゝも内ゝゝ。仏種八人ゝ赤ゝ橋ゝ本地ゝ三貫目
の他ゝ世ゝの為ゝ仏ゝ祖師ゝ弘掛ゝ信ゝ祖師の出ゝ家ゝ夕の看病ゝ二
人の母ゝゝ七ゝ法ゝゝゝて世ゝ十七ゝ為ゝのまゝて家

衣かけさせ正信偈のつとめし群参もおがみてまゐると同じ事へ
むけしからぬ聴聞者ハ七八仏にいたひの芸居ぬ仏檀へ参るとも
釈迦の御命亡者の縁へ入ての気ちやへと鼻をつまみ合せ群衆
此功徳ハ山ほどもまで中くへ手をあき仇に身の港をもうそ
坊さまきかれぬさかい御七首和讃八首和讃のたいめ夜文帖一部
のたし文様はいどうの仏様やよろしき拙くやがわると宮覚へ。
足の掃ろう所気毒さいらひ。かうさいのおで鼻をかいとハ信心が
決定せねば人の事と我口ニ異見すれど左も七十ろうかんぞ
釈迦様ハ地年より去られバこそに発の事がとく仏付合
するハ本の事を肝ハ八の精進も祖師様がち付てもなし。母若
人の目さへ精をすれバ人のりし。や拙もちと参ると思ふて乃や

お勤せよしの女も満てなる面白いつのりやといふを清て
つとめわうも拙人の勿体ないぬ拙じや。今日御ともして居るへ宗旨
御宗旨の御勧化を仏の日ハおく前でも御宗旨の日ハ精をと
代講頭をもする拙く見えがいつきう仏親鸞さまを
つとめ拙く左も七わハ多くいよりや。志うしけ拙ども則ち御若とて
出来様よ御縁のさへでかるかふし諦でさて拙つとめぬ。ず
清さうの時釈迦のおへ出て私ハちと正教ひがござりますす祖師
上人さま越後へ御配流さまで二十余年の御経典は乃
意さ光を房せ給ひての御苦労ハとりけ身のため
なひ濁世の衆生と仰け人との御縁りと承つとべ拙さへ私共が
安楽にさもしぬするも皆やうのけ若つ相とをへやまり冥加な

いつとなく年ゆきて六四八の二十日宮と呼て来りしこそ
ゆとまりとなひとんで彩の紙をつかひ大きに喜び世間人民
の大彩でありしをもて世俗の高ひ毎に見まねして物しいとけなき
なりしこそおい若れよりの思ひ出やきれさしけかゝぬあるべきなり
やうして。ゆえうの月云出抜の日の思焼の乃ち月の色
とうるなり夏具出世さんの乃茶只庭の思焼の乃ち月の色
ようこそ。ぬの雨のく元拔へて。下世の小百姓しなまれの紙をこそて
みの若の日方来とせのひしこそひ出て。若れを遠
とかたてより。為こ年の着物も法こ〳〵ゆります
やうにたのむ本法こ雨のうそ。法こ〳〵ハ大法の板安山で山伏
の法人よ出あひ法令もこ名名さつりこ剥こまこ法世人

ほおりて命かゝく来ぬるとこの法のがりて生西八ゆりしかどもんな
ゆこと上こゆうゆこさ遊さ及行の痛こがつ〳〵焼栗の芽も
生ずこ枝乗ゆこ紙の上けりゆそ秋こ月ゆ力やしあのゆ
ものゆこさ蛇こ四のこの月こ付て一部四の八の偉ゆ世一四同
法ゆかゝ病こそのそ月しもゆ為なうのゆこ名ひゆこさ
則伝のいこうゆこ法こ出でこさ法ゆこ法ゆこ法ゆこ
ゆこ名世界とゆの通ゆこ仕合考でこさ教てゆこ名八名儀
とゆの法ゆこ名ゆの法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ
きこゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ
の姫風のゆこゆこて三ゆ起さざりしゆ大傷ゆこゆこ法ゆこ法ゆこ
ゆこ。ゆこゆこの法ゆこゆこ合ゆこゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ法ゆこ

て居中始の初孫さん孫さんゆしまゝ世の仕内ぬ中
の余間さ赤猫ゞ井さ人へさまつて引ごまで居出来れの巻ひ
と八百ぬ手の出内の中へ拾れ手拾のぬちうひと頼出衆他の伝
へ使ひあるけっぬる所清れのの乃場ゝ台堂の様よっぬ行ひ
ゝ大坂ゝ巻子義出紙ぬ出ぬ世ぬ拾ひ人さけへのゝ弟ゝて
出ひのかれ大きあり柏原の大きたつも後中の一きのひゞ大乳の
ゝのをゝあるゞ物を酒ひゝ人ゝ出て地蒙の様とつぬ行ひし
て桜桐のゝ多ゞ市賣さう初仁尾の猫ゝもゞゞゝ休ゝと鶏ゞ出
ゝ三郎とやゝゝゝ月ゝ大ゝ也乃ゝ宮でゝ秋ゞ原ゝ委
も狩ゝ月ゝて猫ゝ出ゝ私も初云ゝ来ゝゝ海せゝゝとゝ人へ代堂
拾ゝ出ゝゞ行ゝゝ手の新ゝとゝけゞ行ゝ出ゝ世の老ゝ。

矢の拾ゝ手ゝの蒙ゝの面ゝ拾ゝ初ゝ角
撃の大毒ゝ降ゝ仁合ゝての出ひ人ゝ出ゝ地ぬ仁ゝ人ゝ
一表月ゝ月ゝ参ゝと写て狩へ拾ゝと拾ゞ出ゝ乃ゝ七ゝ大毒ゝ
拾ゝ出ゝゞ人ゝ猫ゝの猫ゝの出ひ出ゝ仁ゝ月ゝ大孫ゝて新ゝ月ゝ
ゞ行ゝ行ゝ毒ゝ酒ゝと毒ゝ毒ゝ人ゝ人ゝ出ゝ毒ゝ毛ゝ出ゝ毒ゝ人ゝ
乃ゝ出ゝ人ゝ人ゝ代ゝ代ゝ猫ゞ切ゝて新ゝ三ゝ大ゝ乃ゝ
降ゝ人ゝ出ゝ逆ゝ人ゝ踊ゝゞ世ゝ人ゝ人ゝ出ゝ来ゝ人ゝ
猫ゝ新ゝ乃ゝ乃ゝ人ゝ猫ゞ猫ゞ猫ゞ猫ゞ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
乃ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
ゝ人ゝ出ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
ゝ人ゝ出ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
ゝ人ゝ出ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ
ゝ人ゝ出ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ人ゝ

ワもふかくの些すくひるれど、のそれ〱安娘ニ南方がたまで
まあ十〇むかし仍て敬れし。一両一分もぞ々のまゝとれ

㊂ 呑こみ鬼一口の文菓屋

呉越の人ハ文身とて轨身と彩り衣服のかりとする漁夫
のすぎ以ハしておよ沼ミて世なかる也大と安しが江戸の
髪たて氣ハ入魂と混ざりかの分らもひよ説のまゝとひとそしく不
背中ニ眉ろ又の前尻ろぶさニ至りてハ宗ぷ弘法大師がござる
だ般若経六百巻でも彫てのひかぬ無縫ハ氣性そまがり仍ろ
ゐあり。上方邪扇ハ冬まめかくの力涼りし。浅見ニ彦生く彰で
称も支離ニおかいでも男ハ男で無まべこそ江戸中が都ゝぞでも
おし。寝房ニ供あてぬかそ禅百出のお坊ハ赤勘の代まそてかへ
あべらじ着より今ゝいてらまて百歳の都より天代が郎の末
までも。彩かぬ文ハ衣装送りかふせべ比叡の山風とてふひも
滴りもゆく宮やれ今洗の浪像ておくいたる三二挺ぞて
夜屋よのゝ濡ざぬとぞひもべからず深川やさんとも有りて深川
よ見の花御としいふ寄屋者ぞふとん二疊よえりしさ枕の床も丸し
ときん窒かでも着ハ一種まそ衣装といふが客のおゝ七つ借ぞ気
の坂屋ともいそねとこ閏よたてゝあゝまゝべからの一箱見かうその
おゝべこぞ寝かきさゝ漬のすまゝべ地もこ流の心未記や二階
浅あかりぬ出ぞくまもし茶屋所の九だ井れおそて物好ふ
どかしされぞとお乃へべさかのにて。今でもむかの風俗へ居さぞりし
黒羽よ落し佩の鍬毅も掃除のまるの薄の旗ゝ天窓ハ文くの

宛行家業。医者俳諧師鼓打のかゝりもあり。千両とつかみてへ傾
城もかきわくとまゝにても呉服屋が男より蒔絵の目まで悪縁
のたぐひとも種十徳つきのこきせるの烟草を夢もかゝやかせ煙のかけ。
断あれば出さぬ身持ゆへ織ても連て来まさるゝ事かたき上でも仕
立らるゝ商人よりも名代の座敷の高名ある蓬莱の影でも住
るしからぬ業ぞ。抱ゆる仕せて屋を敷かうそ家内の医者
にて居候の来のきりんびんと諸勤向もみつとも仕
手冲でのあたるひ毎夜戸が手際ても照てもかくさぬ挽び
る十日よ一度のめでたい接持ちる吸物の加減よ酒盃のさ
あまる湯の潮よ風わるゝそのものよふの板りしくうそく
涼みの湯の後合と口合のひつけよ歌文会香合杯判者や

と同輩子の御礼を包ゝのまゝよ戸鏡の名は二階で寝り挽まさく
下がりし天井裏は楼閣簾でせうぶ手の住居がら
のまゝは今春二あるいはよりも実母も居候も隠居まで繕をかぶせ
の事へ家に安宅抱びも今宵もりは抱と会合の挨拶けて門口までも
よりつら孫は古き衣よ扇を立つ刀付け汲きよ剃りてご家老が西へ
仕付けにて戸を閉させて留主の神酒のとのぞけば寒まで女房衆
て仕立つさ中よ行儀見よ子よ鼠の巣紙屑とろゝ下緒所足駄も
のくそへさぬ解の家だらりて与えたが新も刀さしどとの踊く
酒屋で寝ねまゝば宿替てでもござゝねが内にきゝかへりと見へて
て二三日も戻らねまゝせぬ結のござるのものもちと心が遠
ろさといふにて憎さもかくし居ても太々く合点のそゝ金よ

扨こゝに柳原の古手屋の裏に正面むかふて遠へ入れぬ次郎次の奥
幸田屋が主ハとうに陰陽師の表札も雨ざらしにふるびたまゝ
人の居ぬ所をそれとしらずてわれこそ古き居をとむるやうに身の遠入
だけ進みしハ与五郎が親父や源川の主人じやあるへ参りしとそ
はゝ主でと表図らうかたゞこれらく拙きたゞらうぞうとして
只主へ吾の親が主人ハ急ぎ夕手に古給本衣をさげ背中にハ荒縄で
子供柄の形り綴冊の二枚屛風を背負ひて蓬莱山のすくも
絵合二人ハ与五郎を見るやその先をとらせ見て揮じ出めて様子
二度の表紙ハ嵐の絵の冠首のつりたけ切あけてそれを主とすゝ
の肩を手で染図の端も見へ二人がすゞしきを表のくせ柱
ま人付木一枚のせてハ鼻ぎけわくい稲妻のぴかりちらと屋

やりかたとてまでおりよりても仇ハやまぬと是ハ表から子を頼み
て来山伏の法ん冊さて拙かれらを所のあらす古人魔が付まつり
中にある方子の大本で仕合たちとなりの家の利意がやうべ
ほしありやをはきにけ出来たる肉米沢山の事でもありさへ茶会
ははらへいるおの先生が粋じやと粋でこのとをり逢さ云わけて
ふらふらとて異血の行方をさぐりてハとくざんぐの鼻もあるき
ましてけ其事へよる稟の形けざ望人を約ざけど銭百文合力
すへばでも寄て絵つさがしたと二人がおもてを頼りと投出して行
をも見せずよかりけりが表人ハ地ぐり出かね百羽とさけて茶を集
が黒絵は与五郎がかつさ地ぐりるしうさで修ちゞ名一時のさき
げん上戸かめさの井にて寝入りしハ女のこゝ手にておもわしも悩

ど。弟二組一枝ゞ百あまりする花のおくれ毛ばかりの長き者も
あるゝ長ひ高りゝ。ゝゝあそ分九七ぢら拔てゞ長き松
性と面白ゞるも行あるべ。ぱ長つもそ後ゝまるつゝと世る
姫さゞりて分は僕たてさ傷坊ゝあて上月かとゝ十日のろ糸
の仲先一ゝ社たまりそるゆさゝゞ分の間の財へ行るゆかと
拔てうまゝさ教の言者の分ゝゞたゝ来てそでへすゞ
と行ゝてゞさる四大家へ出抱への世話。付髪ゝ信元の九間足へ。
さゝそくの石付。姫ての出絵ゝ。三番目の松風へ出拔ゝ人の医師
石川松房ゞ小教大教へ言ゝ。ゝ長ゝも嘲ゝもそ日の大出来。
こゞとゝう教ゝゝつのまゝゝ中ゝ長ゝつゝ付髪拔ゝて。坊ゝ天宗
ゝりまゝすゝ出機ゝとそも気へ性ゝすゝ松房の後乃ゝ生

弱新八ゝゝゝゝ絵ゝゝ男ゝ出ゝ付髪の間さゞ松房のゝゝ
さまゝむりゝゝゝ付ゝゝかゞゝゝゝゝゝゝゝのゝのゝゝ
髪ゞ出来さゝもゝむゝゝ長ゝゝゝゝも今ゝゝゝ松風ゞゝゝ
ゝゝゝんゝ絵ゝゝゝ手屋へゝゝゝゝゝゝゝゝ
小教ゝ付髪の絵ゝ髪ゝさゝゝ長絵の格ゞゝ大教ゝ
して紙賛中国ゝ七ゝゝ様ゝくゝの中国ゝゝゝゝゝ
国の部ゝ二人ゝもゝ分ゝゝゝゝゝ松房ゝさを
ゞゝ光絵ゝゝて人ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ桃林ゝ寿ゝ紀さゞ風ゝ出ゝゝゝゝゝゝゝ
の付髪ゞゝ老ゝ付てゞゝゝゝゝゝゝゝゝ
分ゝゞゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

付髪とさびしけれども松原老のさび筋(すじ)なりの墨(くろ)さ
よりはハ海の底(そこ)そわるくたへるまつ

二ゝ奉納